The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	村上春樹『ノルウェイの森』におけるホモソーシャル関係と恋愛
Author(s)	津田, 保夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

村上春樹『ノルウェイの森』におけるホモソーシャル関係と恋愛

津 田 保 夫

１．はじめに

1987 年 9 月に上下 2 分冊で刊行された村上春樹の長編小説『ノルウェイの森』は発売直後から爆発的なベストセラーとなったが、その帯には作者自身の手による次のようなキャッチコピーが付されていた。「これは恋愛小説です。ひどく古ぼけた呼び名だと思うけれど、それ以外にうまい言葉が思いつけないのです。激しくて、物静かで、哀しい１００パーセントの恋愛小説です。」 それによって「この作品はまずもって、＜恋愛小説＞という枠組みを与えられて読み解かれる運命を担ってしまったといえる」のであり、「発売から間を置かずに発表された同時代評や、その後十数年にわたって積み重ねられてきた批評・研究の多くが、この作品の描いた（あるいは描かなかった）＜恋愛＞という＜関係性＞のあり方を軸として展開されるものとなったことも、このことと切り離せない面を持っている」[1] と島村輝は指摘している。

もちろん『ノルウェイの森』はたんなる恋愛小説の枠組みに収まりきれるものではないが、恋愛という関係性がこの作品の重要な要素となっていることも否定できないであろう。そして島村は引き続き「＜恋愛＞の物語を成り立たせていく動因として、まず目につくのはこの小説の中に何度も繰り返される、男女が形づくる＜三角形＞の構図だろう」[2] と述べている。実際この作品の中には、語り手の「僕」すなわちワタナベトオルとキズキと直子、ワタナベと直子と緑、ワタナベと直子とレイコ、ワタナベと永沢とハツミなど、男女の三角形をいくつか認めることができる。そのいずれにおいてもワタナベが関与しているが、作品全体の中心となっているのは、やはりワタナベとキズキと直子の関係であろう。そしてこの三角形の男女関係において特徴的なのは、男性のワタナベとキズキが親友同士でいわゆるホモソーシャルな関係にあり、この二人の男性の間で女性の直子が形式上やりとりされているという点である。直子は最初はワタナベの親友キズキのガールフレンドだったが、キズキの死後にワタナベの恋人になり、直子自身の死によって再びキズキへと返されることになる。つまり、直子はまずキズキからワタナベに譲渡され、最後に再びワタナベからキズキへと譲渡（返還）されるという図式である。

---

[1] 村上春樹研究会編『村上春樹作品研究事典増補版』（鼎書房 2007 年）160 ページ（島村輝による『ノルウェイの森』の項目）。

[2] 同上。なお島村輝はそのような三角関係に着目した論考として川村湊「＜ノルウェイの森＞で目覚めて」（『群像』1987 年 11 月号、pp.200－205）を紹介しており、川村は「『ノルウェイの森』は、一言でいってしまえば＜僕＞をめぐるさまざまな三角の形の＜愛＞の葛藤を描いたものなのである」（201 ページ）と論じている。

「ホモソーシャル」とはイヴ・K・セジウィックによると「同性間の社会的絆」[3] を表す用語だが、彼女は著書『男同士の絆 ― イギリス文学とホモソーシャルな欲望』の中でイギリス文学におけるホモソーシャルな欲望をジェンダーの非対称性と性愛の三角形の構造において捉え、そこでは「男同士の女性の交換」[4] が行われていると指摘している。そのようなホモソーシャル的関係にある二人の男性の間で両者の性愛対象となる一人の女性のやりとりが行われるという三角形の関係は日本文学の中にもいくつか見いだすことができ、その代表的な作品として夏目漱石の『それから』や『こゝろ』、武者小路実篤の『友情』などを挙げることができるだろう。[5]

小説『ノルウェイの森』をホモソーシャルな関係性の観点から読み解く試みも、すでに石原千秋によって行われている。石原は著書『謎とき村上春樹』の第１章における『風の歌を聴け』の分析のさいに、「ホモソーシャル」を「村上春樹文学を読み解く鍵となる概念」として位置づけ、男性中心的なホモソーシャル社会で男たちは「女のやりとり」によって「男同士の絆」を強めていくことを述べている。[6] その上で彼は『ノルウェイの森』の恋愛のテーマを次のように解釈する。

> ワタベトオルが自殺した親友のキズキから直子を譲られる。まさにホモソーシャルな関係である。しかしこれが「誤配」だったことは明らかだ。直子はワタナベトオルを愛せなかったからである。そこで、直子をプレゼントされたワタナベトオルは、ホモソーシャルな関係の中で、自分の責任を果たそうとする。ワタナベトオルが自分の責任を果たすやり方は、キズキのもとに直子を届けること、すなわち直子を自殺させることだ。直子は自殺しないかぎりキズキのところに行けない。そのことがわかっているから、ワタナベトオルは直子を自殺させる。それが彼の責任の果たし方だった。つまり、ワタナベトオルの仕事とは直子を自殺させることだった。それが彼の唯一の仕事だった。そしてそのことのすべてを、文学は「恋愛」という言葉で呼ぶことができる。これが結論だ。[7]

つまり『ノルウェイの森』は、ホモソーシャルな関係にあるワタナベトオルとキズキとの間で、ワタナベへと誤配された直子を正しい宛先であるキズキのところへ届ける物語だとする解釈である。ただし石原はそのあとでさらに、最終的にはワタナベが直子を自殺させたのではなく、自殺は直子が自らで責任を取るために主体的に行った行為だとして、「直子が大人としての責任をとる物語」[8] でもあると論じている。

---

[3] イヴ・K・セジウィック（上原早苗・亀澤美由紀訳）『男同士の絆 ― イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（名古屋大学出版会 2001 年）2 ページ。
[4] 同上 24 ページ。
[5] 日本文学におけるホモソーシャルに関する問題については、國文學編集部(編)『恋愛のキーワード集：境界を越えて』（學燈社 2001 年）104－106 ページ（石原千秋による「ホモソーシャル」の項目）参照。
[6] 石原千秋『謎とき村上春樹』（光文社 2007 年）73－74 ページ。
[7] 同上 279－280 ページ。
[8] 同上 314 ページ。

この作品の中にそのようなホモソーシャルな性愛の三角形の関係が存在し、それが非常に重要な役割を果たしていることは間違いないだろう。しかし上記の石原の解釈には一つの大きな疑問が残る。それは、キズキから直子を譲られたワタナベが自分の責任を果たすやり方は直子を自殺させることだったのか、ということである。たしかに結果的には直子は自殺してキズキのところへ送り届けられたことになるが、石原自身も認めているように、直子の自殺はワタナベの意図によってではなく直子自身によって行われたものである。ワタナベはむしろ逆にずっと直子の回復を願い、直子に一緒に生活することさえ提案している。

だとすると、キズキから直子を受け取ったワタナベが責任を果たそうとしたやり方は、直子を自殺させてキズキのもとへ送り届けることではなく、ワタナベ自身がキズキの代理となって、キズキが本来なすべきだった役割、すなわち直子の恋人としての役割を代行することだったのではないだろうか。

2．キズキの代行者としてのワタナベ

ワタナベにとってキズキは「仲の良い友人」で、「仲が良いというよりは僕の文字通り唯一の友人」（上 47）[9]であった。ワタナベは「一人で本を読んだり音楽を聴いたりするのが好きなどちらかというと平凡で目立たない人間」（上 49）であり、キズキも「決して社交的な人間ではなかった」（上 48）。つまり、ワタナベとキズキはどちらも他者との関わりを好まない非社交的な人間なのだが、「我々はすぐに気が合って仲良くなった」（上 49）のである。このことから、二人が唯一無二の親友として男同士の深い友情の絆（あるいはホモソーシャルな絆）で結ばれていたことがわかる。

一方、直子はキズキの「恋人」だが、二人はお互いに「殆ど生まれ落ちた時からの幼なじみ」（上 47）だった。そのためか「彼らの関係は非常にオープンだったし、二人きりでいたいというような願望はそれほどは強くないようだった」（上 47）。そのようなキズキと直子の幼なじみ的恋人関係の中にワタナベが介入することになったのは高校二年生の春で、キズキからダブル・デートに誘われ、ワタナベは直子と初めて出会う。しかしワタナベは直子が連れてきた友人の女性とはまったく話が合わず、やがてキズキもダブル・デートを諦め、ワタナベとキズキと直子の三人で会うことが多くなっていった。こうしてホモソーシャル関係と異性愛関係が絡み合ったワタナベとキズキと直子による三角形の関係は形成されたのである。

これはワタナベにとっては「いちばん気楽だったし、うまくいった」（上 48）関係であった。しかし「いつもキズキが一座の中心にいた」（上 48）のであり、「キズキが一度席を外して二人きりになってしまうと、僕と直子はうまく話をすることはできなかった」（上 49）。つまり、ワタナベとキズキはホモソーシャルな友人関係にあり、キ

[9] 小説『ノルウェイの森』からの引用等は講談社文庫版（2004 年発行）から行い、カッコ内に巻とページ数を記す。

ズキと直子は異性愛関係で結ばれているが、ワタナベと直子の間には少なくとも外面上は直接的な関係はなく、キズキを媒介としてのみ、つまりキズキを接点とした三角形の関係でのみ間接的に繋がっていた。したがってキズキの死によって媒介項が不在になると、ワタナベと直子との関係はいったん途切れてしまうことになる。ワタナベはキズキの葬式の二週間後にちょっとした用事のために直子と一度だけ会っているが、「用件が済んでしまうとあとはもう何も話すことはなかった」（上 50）のであり、「一年後に中央線の電車でばったりと出会うまで一度も顔を合わせなかった」（上 50）。そしてこの一年後の偶然の再会によってワタナベと直子の直接的な関係は始まるのだが、そこにはやはり死者としてのキズキが媒介として介在していた。

ワタナベが直子と知り合ってから一年と少し経った高校三年生の五月にキズキは自宅ガレージで自殺する。しかし「遺書もなければ思いあたる動機もなかった」（上 52）。ただ、その日キズキはワタナベに午後の授業をすっぽかしてビリヤードに行かないかと誘い、キズキが勝負に勝って、約束によりワタナベがゲーム代金を払っている。ゲームのあいだキズキは「冗談一つ言わなかった」（上 51）が、「これはとても珍しいことだった」（上 51）。ワタナベがいつにないキズキの真剣さを指摘すると、キズキは「今日は負けたくなかったんだよ」（上 51）と答えている。このことから、この日にキズキはワタナベをライバル視していたらしいことがわかる。では何に関するライバルであったろうか。それはやはり直子をめぐるライバル関係ということになるだろう。

キズキの自殺の原因を推測する手がかりは、後に直子により語られる出来事に見いだすことができる。それはキズキと直子の性交がうまくいかなかったことである。彼らはお互いに深く愛し合い、「十二の歳にはキスして、十三の歳にはもうペッティングしてた」（上 263）にもかかわらず、性交しようとすると直子の方が「全然濡れなかった」（上 230）のである。そのような身体的あるいは無意識的な性的拒絶がキズキに深い絶望を与えたであろうことは十分に想像できる。[10]

しかしそれだけではなく、もしかしたらキズキは、自分に対しては拒絶された直子の性的欲望がワタナベに向けられていると感じたのではないだろうか。「キズキ君があなたのことを好きだったように、私もあなたのことが好きなのよ」（上 265）と言うように、直子はキズキを媒介としながらもワタナベに対して好意を寄せていた。また何よりも直子は二十歳の誕生日にワタナベと性交しており、そのときには「あなたに会った最初からずっと濡れてた」（上 231）という事実から、直子の身体的な性的欲望がワタナベに向けられていた可能性を推測することもできるかもしれない。

直子とは心では本当に愛し合っているけれども身体的性的には結合することができないことにキズキが深く絶望していたとするならば、その拒絶された自らの身体を消滅させる自殺という方法しか彼には残されていなかったのだろう。そうして直子の身

---

[10] 石原千秋も心から愛する人とセックスができないことによる「キズキの絶望の深さ」を指摘している。石原（前掲書）283 ページ参照。

体的性的欲望がワタナベに向けられていたとするならば、その欲望を充足させて身体的性的な結合をホモソーシャルな関係においてキズキのために代行し、同時にキズキの身体的性的欲望の充足も代行してやることが、ワタナベの責任ということになるだろう。そしてその責任は直子の二十歳の誕生日の夜に果たされるのだが、それによって直子もまた死へと向かうことになる。

３．直子の心と身体の分裂

直子はワタナベのことを「好き」ではあったが「愛し」ていたわけではなかった。物語の語り手の「僕」としてのワタナベ自身も「直子は僕のことを愛してさえいなかった」（上 23）と書いているし、「僕のことは愛していたわけでもないのに、ということ？」というワタナベの問いかけに対して直子は「ごめんなさい」（上 231）と答えている。直子が本当に愛していたのはキズキだけだったのだ。

ところがキズキと性交しようとしたときには「全然濡れなかった」（上 230）。それに対してワタナベに抱かれたときには「最初からずっと濡れてた」（上 230）のである。さらに「そうしてずっとあなたに抱かれたいと思ってたの。抱かれて、裸にされて、体を触られて、入れてほしいと思ってたの。そんなこと思ったのって、はじめてよ。どうして？　どうしてそんなことが起るの？　だって私、キズキ君のこと本当に愛してたのよ」（上 230）と直子は言う。石原千秋も指摘しているように、直子は恋愛において「心と身体が一致していない」[11] のである。

直子と同じように「心と身体が一致していない」女性が作品中にもう一人登場している。阿美寮での直子の友人レイコである。レイコは十三歳のピアノの教え子から同性愛的行為をされ、心では激しく拒絶しながらも「あんなに濡れたのはあとにも先にもはじめてだった」（下 21）というほど身体の方は反応し、「主人とやるよりその子とやってる方がずっと良かったし、もっとしてほしかった」（下 23）ほどであった。そのような心と身体の分裂という点において直子とレイコは同類である。そしてこの心と身体の分裂がレイコの心を崩壊させ、また直子の心の病を引き起こした大きな原因の一つであっただろう。しかし直子の心と身体の分裂は、直子とキズキとワタナベの三人が作りなす三角形の関係と深く関連しているように思われる。

直子とキズキは「本当にとくべつな関係」（上 231）だった。「私たち三つの頃から一緒に遊んでたのよ。私たちいつも一緒にいていろんな話をして、お互いを理解しあって、そんなふうに育ったの」（上 231）と直子は語っている。彼女によれば二人は「普通の男女の関係とはずいぶん違ってた」（上 262）のであり、「何かどこかの部分で肉体がくっつきあっているような、そんな関係」（上 262-263）であった。そして直子にとってキズキとはすでに「肉体がくっつきあっているような」関係にあったために、さらに身体的性的に結合したいという欲望は生じてこなかったのであり、それが直子

[11] 石原（前掲書）282 ページ。

とキズキの性交が失敗した原因ではないかと考えられる。直子は自身の性的欲望をすでに「お互いの体を共有している」（上 263）ように感じていたキズキに対してではなく、自己の外部にいる他者に対してしか向けることはできないのである。

直子とキズキはいわば母の胎内にいる双生児のようなもので、外部から閉ざされた平和な空間の中で他者と関わることなく二人だけで充足している内閉的な関係であった。「私たちは無人島で育った裸の子供たちのようなものだった」（上 264）と直子は言う。しかしいつまでも子供のまま二人だけの平和で充足した無人島の内閉的な楽園の中にとどまりつづけることはできない。「私たちはどんどん大きくなっていくし、社会の中に出ていかなくちゃならない」（上 264-265）ことは直子にもわかっていた。

そうした内閉的な関係の二人を他者として外部の社会と接触させる役割を与えられたのがワタナベである。二人にとってワタナベとの関りが「最初の他者との関り」（上 265）であった。そして直子がワタナベに言うように「あなたは私たちと外の世界を結ぶリンクのような意味をもっていた」（上 265）のであり、「私たちはあなたを仲介にして外の世界にうまく同化しようと私たちなりに努力していた」（上 265）のである。しかし「結果はうまくいかなかった」（上 265）。キズキと直子の自己充足的で内閉的な関係にワタナベがホモソーシャルな関係によって加わることで形成された三角形の関係はやはり自己充足的で内閉的なものであり、その関係の中で直子は「すごく気が楽」（上 261）で「安心していられる」（上 262）が、「そういう小さい輪みたいなものが永遠に維持されるわけはない」（上 262）のであり、「それはキズキ君にもわかっていたし、私にもわかっていたし、あなたにもわかっていた」（上 262）のである。[12]

キズキが直子とワタナベを残して自らの命を絶ったことにより、自己充足的な三角形の関係は崩壊した。先に述べたようにキズキが直子とワタナベを繋ぐ媒介項となっていたため、残された二人の交流はそれから約一年間途切れており、それが再開されたのは中央線の電車での偶然の再会によってである。キズキの死は直子に大きな混乱をもたらした。「あの人が死んじゃったあとでは、いったいどういう風に人と接すればいいのか私にはわからなくなっちゃった」（上 231-232）のである。ワタナベが直子と偶然再会し付き合うようになったとき、直子はそのような状態であった。

したがって直子はワタナベと付き合うようになっても、「彼女の求めているのは僕の腕ではなく誰かの腕」であり「彼女の求めているのは僕の温もりではなく誰かの温もり」（上 61）でった。この「誰か」とはいうまでもなくキズキであり、直子はキズキとホモソーシャルな関係にあったワタナベを通してキズキを求めていたのである。いわばワタナベはキズキの代理であり、キズキの役割を代行していたにすぎない。しかしワタナベはキズキとは異なり、直子にとっては「他者」であった。そのため直子は自己と未分化であったキズキには向けることのできなかった身体的性的欲望を「他者」

---

12 このような少人数のグループの自己充足的で内閉的な関係が崩壊するモティーフは、村上春樹の他の作品、たとえば『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』でも別な形で用いられている。

としてのワタナベには向けることができたのである。とはいえそのときのワタナベはやはりキズキの代行者であり、いわば「他者」としてのキズキであった。二十歳の誕生日に直子はワタナベと初めての性交を行ったが、直子はキズキの代理人としてのワタナベを通して、果たせなかったキズキとの性交をなしとげたのである。[13]

キズキの死後のワタナベと直子の関係もキズキを媒介として、「キズキという死者を共有」（下 264）することで成り立っている。キズキが生きていたときと同じく、三人が作りなす関係の三角形にはワタナベと直子とを結ぶ一辺が欠落している。「彼以外の人になんて殆ど興味すら持てなかった」（上 262）ほどキズキだけを愛していた直子にとって、ワタナベはキズキの代理としてのみ恋愛的関係になることが可能であった。ワタナベがキズキの代理となりえたのはキズキが「僕にとってはたった一人の友だち」で「その前にもそのあとにも友だちと呼べそうな人間なんて僕にはいない」（上 261）ほど深いホモソーシャルな関係で結ばれていたからである。そしてキズキとの間のそのような関係を通して、ワタナベもまた直子を愛そうとしたのであろう。

直子はワタナベに「こうしてあなたにくっついている限り、私も井戸には落ちない」（上 15）と言う。ワタナベがキズキの代行者を演じている限りは直子を守り続けることもできるのであり、ワタナベは「ずっとこうしてりゃいいんじゃないか」（上 16）と答える。しかし死者であるキズキを媒介としての恋愛的関係は永久に続けられるわけではない。直子もそれが「いけないこと」で「ひどいこと」で「正しくないこと」（上 17）であるのはわかっている。キズキと「離れることができない関係」（上 264）にあり、「まるでキズキ君が暗いところから手をのばして私を求めているような気がする」（上 290）直子には、キズキのいる死の世界しか行く場所はないのである。

一方、ワタナベはキズキとのホモソーシャル関係においてキズキの代理として直子を守りつづけようとする。「お前と違って俺は生きると決めたし、それも俺なりにきちんと生きると決めたんだ」と彼は心の中で死んだキズキに語りかけ、「俺は彼女を絶対に見捨てないよ」（下 204）と誓っている。

こうしてキズキのいる死の世界へ行こうとする直子とそれを生の世界へ引き戻そうとするワタナベの試みが行われ、直子はいわば死の世界と生の世界の間、あるいはキズキとワタナベとの間の緊張関係に置かれることになる。そしてそのような関係を解消させる要因となったのが、緑の介入である。

４．緑の介入とホモソーシャルな三角関係の解消

『ノルウェイの森』の第 2 章と第 3 章は短編小説『蛍』と重複する部分が多いが、その中の重要な脇役であった突撃隊と呼ばれる学生が第 4 章でなぜか突然退場する。[14]

---

[13] それはいわば『１Ｑ８４』で天吾がふかえりとの性交を通して、遠く離れた青豆との性交を行ったのとも類似している。

[14] 突撃隊は、「あまり多くはしゃべら」ずに「二人で黙り込んで喫茶店で顔をつきあわせていること」（上 59）が多かったワタナベと直子の間で中心的な話題となることによって、それまで二人の媒介者として

その直後に入れ替わるように登場してくるのが緑である。彼女は「まるで春を迎えて世界にとびだしたばかりの小動物のように瑞々しい生命感を体中からほとばしらせて」（上 107）いた。緑の「瑞々しい生命感」はキズキのいる死の世界へと引き寄せられている直子とは対照をなし、いわば生の世界を体現している。

一方、直子を生の世界へ引き留めようとするワタナベ自身もまた死の世界にとらわれている。親友キズキの死は彼に「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」（上 54）という感覚をもたらした。「あの十七歳の五月の夜にキズキを捉えた死は、そのとき同時に僕を捉えてもいた」（上 54-55）のであり、「生のまっただ中で、何もかもが死を中心にして回転していた」（上 55）のだった。そのためワタナベは生命感あふれる緑から話しかけられたとき、「こんな生き生きとした表情を目にしたのは久しぶり」（上 107）だと感じたのである。

キズキの死後にいわば生と死が入り交じったような世界に生きていたワタナベは、生の世界を体現するかのような緑に惹き付けられるようになる。すると直子からワタナベのもとへ便りが届き、ワタナベは直子のいる京都の阿美寮へ出かけていく。そこは世間から隔絶された異界ともいえるような場所で、ワタナベが読んでいたトーマス・マンの小説『魔の山』に出てくるサナトリウムのような死の雰囲気が漂う世界であった。そこで彼は異界の住人のような直子と再会するのである。

帰路に就いたワタナベは山を下りると、「これが外の世界なんだと思って哀しい気持ちになった」（下 40）。そして東京に戻ると周りの情景に「頭が混乱」（下 42）する。これは彼が下界の現実世界とは異なる阿美寮の特異な世界になじんだため、逆に現実世界に対して違和感をもったことを示している。その意味でも、この阿美寮は一種の異界をなしており、ワタナベによる阿美寮の訪問は一種の異界訪問譚である。そこは一種の冥界であり、ワタナベは冥界へ直子を連れ戻しに行ったけれども失敗して一人で戻ってきた、と寓意的に読むこともできるだろう。それはイザナギによる黄泉の国への旅や、オルフェウスによる冥界探訪とも構造的に類似している。[15]

ワタナベはそのあと生の世界の体現者ともいえる緑と会うが、緑は彼を見て「幽霊でも見てきたような顔してるわよ」（下 46）と言う。実際ワタナベが会ってきた直子は死の世界にいる幽霊のようなものであった。一種の冥界ともいえる阿美寮から戻ってきたばかりの彼は「世界にまだうまくなじめない」（下 48）が、緑に会うことによって「少しこの世界に馴染んだような気がする」（下 55）ようになる。つまり、緑はワタナベを死の世界から生の世界へと引き戻す役割を果たしているのである。

しかし緑も死の世界と無縁なわけではなく、死に瀕した父親の看病を続けており、やがて父親も亡くなる。しかし彼女は死の世界に取り込まれることなく、現実の生の

の役割を果たしていたといえる。突撃隊から緑への交代はその関係を変化へと導いていくことになる。

[15] 大塚英志は「イザナギ・イザナミの挿話における生者としての男が死者としての妻を訪問する物語と同一の構造」が村上春樹の小説で反復されていることを指摘している。大塚英志『物語論で読む村上春樹と宮崎駿』（角川書店 2009 年）49 ページ参照。

世界で生き生きとしている。その後の二度目の阿美寮訪問から帰ったあとで緑と抱き合ったときにワタナベは「本当に久し振りに生身の人間に触れたような気」（下 231）気がするし、緑は「私は生身の血のかよった女の子なのよ」（下 232）と言う。これはまだ生きていながらも死の世界にいるかのような直子とは対照的であり、ワタナベの緑に対する気持ちは直子に対するのとは当然異なる性質のものとなる。

「僕は直子を愛してきたし、今でもやはり同じように愛しています。しかし僕と緑に間に存在するものは何かしら決定的なものなのです」（下 242）とワタナベはレイコへの手紙に書いている。そして「僕が直子に対して感じるのはおそろしく静かで優しくて澄んだ感情ですが、緑に対して僕はまったく違った種類の感情を感じるのです。それは立って歩き、呼吸し、鼓動しているのです。そしてそれは僕を揺り動かすのです」（下 243）と続ける。彼はそんな緑の生命力あふれる魅力に惹き付けられ「その力に抗しがたいものを感じるし、このままどんどん先の方まで押し流されていってしまいそうな気がする」（下 243）が、その一方で直子に対する気持ちを抑えることもできず、直子と緑の間で、言い換えれば死の世界と生の世界の間で揺れ動くのである。

そのようなワタナベの迷いに決着を付けたのは直子の死であった。第 10 章の冒頭で突然「直子が死んでしまった」（下 248））と語られる。森の中での首つりによる自殺であった。傷心のワタナベが一人旅に出ると、「彼女のイメージ」は彼の体を「奇妙な場所」へと押し流し、「その奇妙な場所で、僕は死者とともに生きた」のであり、「直子は死を含んだまま、そこで生き続けていた」（下 252）と彼は感じる。直子はとうとう完全に死の世界へ、死んだ恋人のキズキのもとへと自ら去っていったのである。

旅の終りに「なんとか現実の世界に戻らなくちゃな」と考えたワタナベは東京へ戻り、心の中でキズキに対して次のように語りかける。

> おいキズキ、お前はとうとう直子を手に入れたんだな、と僕は思った。まあいいさ、彼女はもともとお前のものだったんだ。結局そこが彼女の行くべき場所だったのだろう、たぶん。でもこの世界で、この不完全な生者の世界で、俺は直子に対して俺なりのベストを尽くしたんだよ。でもいいよ、キズキ。直子はお前にやるよ。直子はお前の方を選んだんだものな。（下 258）

この言葉からも、ワタナベはホモソーシャルな関係においてキズキの代行者として直子を愛し守るためにベストを尽くそうとしたように感じられる。しかし直子がキズキのもとへ送り届けられたことによって、ワタナベとキズキのホモソーシャルな関係に直子が関与した三角形の緊張関係は解消されたのである。

東京へやってきたレイコと自分たちによる直子の「お葬式」を行ったあと、ワタナベが戻るところは緑のいる生の世界しかない。しかし電話した緑から「あなた、今どこにいるの？」と尋ねられたワタナベは自分が今どこにいるのかわからず、「僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた」（下 293）のだった。「どこでもな

い場所」というのはおそらく生と死の間の世界なのだろう。ワタナベと直子は「最初から生死の境い目で結びつきあってた」（下 281）のであり、「死は生の対極にあるのではなく、我々の生のうちに潜んでいる」（下 253）のだから。緑のもとへ戻っても、ワタナベの心の中から直子が完全に消え去ることはないはずである。

５．おわりに

「ノルウェイの森」というタイトルは、直子がレイコにギター演奏をリクエストしたビートルズの曲から採られている。直子は「この曲聴くと私ときどきすごく哀しくなる」ことがあり、「一人ぼっちで寒くて、誰も助けに来てくれな」（上 224）いような気持ちになのであり、それはキズキの死によって現実世界に一人取り残された直子の孤独を表現している。ワタナベはホモソーシャルな関係においてキズキの代理として直子をその孤独から救い出そうと努力したが、直子はやはりキズキのいる死の世界へと自ら赴いていったのである。

小説『ノルウェイの森』は「１００パーセントの恋愛小説」というキャッチフレーズで発売され大ベストセラーとなったけれども、むしろ現実世界における１００パーセントの恋愛の成就の不可能性を示しているように思われる。村上春樹は『４月のある晴れた朝に１００パーセントの女の子に出会うことについて』という短編小説を書いているが、その主人公は１００パーセントの女の子と出会ってもすれ違い、結局は結ばれることはない。『ノルウェイの森』のキズキと直子はお互いに１００パーセントの恋愛の対象だったであろうが、「成長の辛さ」（上 264）を克服し大人になって社会における独立した他者としての恋愛関係を結ぶことができず、死によってしか結ばれることはできなかった。直子の友人レイコとその夫も「九九パーセントまで完璧」だったが、「たったの一パーセントが狂っちゃった」（下 33）のである。

ではワタナベと緑の恋愛はどうであろうか。緑は「私のことを百パーセント愛してくれる人を自分で見つけて手に入れてやる」（上 160）と決心していた人物であった。この小説は 37 歳のワタナベが 18 年前の出来事を回想するシーンで始まり、その回想の中で 20 歳の自分が緑に電話をするシーンで終わり、物語は過去にさかのぼったまま現在には戻ってこない。ラストシーンで「どこでもない場所のまん中から緑を呼び続けていた」ワタナベと緑の恋愛のその後の経過と結末については、作品の中では何も書かれていない。しかし第 1 章での 37 歳のワタナベの状況には緑の存在の気配がまったく感じられないし、村上春樹の他のいくつかの作品に登場する恋人や妻に去られる男性主人公たちとワタナベは性格的にいくつかの共通点[16] があることを考えると、緑とワタナベのその後の恋愛の結末もペシミスティックなものに思えてくるのである。

---

[16] それは永沢がワタナベに対して自分との共通点として指摘しているように、「自分のことを他人に理解してほしいと思っていない」（下 127）し、「心の底から誰かを愛することはできない」で「いつもどこか覚めていて、そしてただ乾きがあるだけ」（下 130）という点である。